序章

―自分の国はどこ？　失われた国の行方

ブハラ州の聖者廟への入り口（イスラーム的なアイデンティティへの回帰として独立後に修復されたモスクなどが多く見られはじめた）。

私が初めて来日したとき、日本の人々は私がどこから来たのかよく尋ねた。ところが、その簡単な質問に対する私の答えを理解してもらうのはとても難しかった。例えば、私が「ウズベキスタン」と答えると、相手の耳には「スタン」だけが残った。多くの人はそれが「パキスタン」で、私の発音が間違っていると思い込んでしまう。そのような反応をみて、私は「ウズベキスタンは旧ソビエト連邦の南部にある国です」などと説明するようになった。すると、相手は当たり前のように、「あなたの国はロシアだね？」と笑顔でフォローしてくれるのだった。そこで、ウズベキスタンとロシアとの違いを説明するために、「ウズベキスタンは、トルコ語系イスラーム教徒であるウズベク人が大半を占める国です」と言うと、その場には混乱した空気が広がった。私はこのような状況を打開するのにとても苦労した。しかも、このような簡単な質問はどこへ行っても挨拶代わりに聞かれ、それに答えるには非常に長い時間がかかった。たいていは、相手が説明の途中であきらめるか、私が大まかな説明しかできず、その場にいた人々も納得できない微妙な空気の中で話題が別の方向に進むのだった。

このような経験は、ウズベキスタンをはじめとする中央アジアの国々が、たとえ正式に独立を果たし世界地図に載ったとしても、日本の人々にはまだ国家として認識されていな

いということに私が気づくきっかけとなった。同時に、私はウズベキスタンの実情をもっと紹介し、ウズベキスタンという国を知ってもらうことが重要だと考えるようになった。これが、本書を書いたきっかけである。本書を通じて、ソ連邦崩壊と体制転換がウズベキスタンの人々の生活にどのような変化をもたらしたのか、読者に伝えることができれば幸いである。

一九九一年に独立を達成するまでソ連邦の一部だった中央アジア諸国――カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン――にとって、独立とは単なる新国家の誕生ではなく、国家統治、経済制度、社会のあり方の変容をもたらすはずだった。実際、各国は、市場経済化と同時に民主化、政治過程における情報公開、社会に対する自己批判的な姿勢の促進、といった社会の近代化に関する改革を実行しはじめた。当然、その過程では、経済格差の拡大をはじめとする経済・社会問題が発生し、人々の人生観や価値観、家族関係に大きな影響を及ぼした。近年、国内外の研究者が、これらの変化とその因果関係を政治・経済的側面から解き明かそうとする研究を数多く発表している。その中には、中央アジア諸国の政府が一連の変化をいかに導こうとしたかについて論じたものも多い。しかし、中央アジアに生きる人々が、自分たちが直面している社会の

激変をどのようにとらえているかについて、彼らの目線から分析したものはまだ少ない。

そこで本書では、中央アジアでもっとも人口が多いウズベキスタンの国民にとって、ソ連邦崩壊がどのような意味をもったのかを探ってみたい。ソ連邦と社会主義という制度が崩壊したのち、人々の価値観はどのように変化したのだろうか。彼らはどのような理想や夢を抱き、悩みを抱えているのだろうか。国家、社会、地域および家族に対する考え方は、ソ連時代と比べてどう変わったのか。また、独立後の社会経済的状況を市民はどう見ているのか。これらに光を当てることで、今日のウズベキスタンをはじめとする中央アジア各国の政治・経済・社会問題を理解する糸口が見い出せればと思う。

本書では、筆者自身の経験に加え、筆者の周りの人々やさまざまな機会に訪ねた地域の人々へのインタビューを利用して、ウズベキスタンの人々の生活を具体的に紹介しつつ、ウズベキスタンの政治・社会・経済的変化を浮き彫りにしたい。本書で数多く引用されているインタビューは、二〇〇五～二〇〇七年に東京大学の「人間地球圏の存続を求める大学間国際学術協力協定（Alliance for Global Sustainability: AGS）」助成を受けて実施された「ソ連時代の記憶」プロジェクト、および二〇〇六年に始まったイスラーム地域研究プロジェクト（東京大学拠点、代表者小松久男教授）の一環として行われた調査の一部である。さら

に、本書は筆者が参加した「アジアバロメーター調査」の結果を利用・参照している。これは、東京大学東洋文化研究所が中心となり、中央アジア諸国で二〇〇三年および二〇〇五年に実施された世論調査である。ウズベキスタンでの調査対象は一般市民八〇〇人である。本書で言及する世論調査のデータは、いずれも「アジアバロメーター」の結果である。

Ⅰ　ウズベキスタンの基礎データ

本題に入る前に、本書でとり上げるウズベキスタンについて紹介しておこう。ウズベキスタンは十二州、一共和国（表1（注）参照）、一市（州と同等の独立した行政単位）からなる。ユーラシア大陸の中ほどに位置する。隣の国のさらに隣に行かなければ海がない、いわゆる陸封国で、周りをキルギス、カザフスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、アフガニスタンに囲まれている。首都タシケントのほかに、歴史上シルクロードの要衝として栄え、ユネスコの世界遺産に登録された、サマルカンド、ヒヴァ、ブハラといった都市についてはご存知の読者も少なくないと思う。特にサマルカンドは、ティムール帝国（一三七

〜一五〇七年）の都として文化が花開いた。余談だが、ウズベキスタンでは「ティムール」という名前の男の子がとても多く、その由来はもちろんティムール帝国の創始者アミール・ティムールである。筆者もその一人というわけである。

ウズベキスタンの人口は二五〇〇万人をわずかに超え（二〇〇二年一月一日現在）、このうちおよそ一六〇〇万人（約三分の二）が農村部に居住している。ウズベキスタンでは出生率が高く、人口は年二〜三％の割合で急速に増加している（二〇〇八年時点で二七一〇万人）。

国民の平均年齢はかなり低く（国民の六割以上が二十五歳以下）、九〇〇万人以上が就労年齢に達していない。このグループに就労年齢の若年グループ（十八〜二十五歳）を加えると、その割合は全人口の過半数に達する。長期的には、このような人口構成は安価で質の高い労働力を提供し、ウズベキスタン経済に競争力をもたらし得る。しかしその一方で、政府は高い失業率、人口密集地における環境問題の悪化などへの対応も求められている。

また、ウズベキスタンは、ウズベク人が人口の七割を占めるものの、ロシア人、タジク人、カザフ人、キルギス人などさまざまな民族が共存する多民族社会である。

現在、ウズベキスタンにおける民族間関係は比較的安定しているが、ソ連邦崩壊直前にはいくつかの民族間対立が見られた。その代表的な例は「メスヘティ・トルコ人」とウズ

表１　ウズベキスタンの行政単位

地　　域	面　積 （1,000km²）	人　口 （1,000人）	人口密度 （人／km²）
カラカルパク共和国*	166.6	1,530	9.2
アンディジャン州	4.2	2,223	529.2
ブハラ州	40.3	1,442	35.8
ジザーク州	21.2	997	47
カシカダリヤ州	28.6	2,216	77.5
ナボイ州	111	794	7.2
ナマンガン州	7.4	1,959	264.8
サマルカンド州	16.8	2,719	161.8
スルハンダリヤ州	20.1	1,774	88.3
シルダリヤ州	4.3	653	152
タシケント(市および)州	15.6	2,385	291.1
フェルガナ州	6.7	2,709	404.4
ホラズム州	6.1	1,350	221.3
タシケント市	n.a.	2,157	
ウズベキスタン(合計)	448.9	24,908	55.5

（注）＊カラカルパク共和国は「共和国」という名前をもつが、これはあくまでも行政上の単位であり、実際にはウズベキスタン共和国内の自治区と位置づけられている。実際、ウズベキスタンの憲法も同国が連邦制をとらないことを明記している。
（出所）ウズベキスタン共和国国家統計委員会、2001 年 1 月 1 日現在。

表 2　ウズベキスタンの民族構成

（単位： 1,000 人）

民　　族	人　口	都市部	農村部	全人口に占める割合（%）
ウズベク人	19,781.4	6,177.9	13,603.5	78.8
カラカルパク人	542.1	301.4	240.7	2.2
タジク人	1,219.9	41.4	805.9	4.9
ロシア人	1,092.7	1,030.4	62.3	4.3
カザフ人	98.6	411.3	574.7	3.9
タタール人	287.4	263.2	24.2	1.1
キルギス人	224.6	28.3	196.3	0.9
朝鮮人	169.6	138.7	30.9	0.7
トルクメン人	149.3	29.4	119.9	0.6
ウクライナ人	100.3	87.8	12.5	0.4
アルメニア人	42.8	41.5	1.3	0.2
アゼルバイジャン人	4.1	32.5	8.5	0.2
ベラルーシ人	22.7	18.5	4.2	0.1
ユダヤ人	11.8	11.1	0.7	0.0
ドイツ人	6.9	0.5	1.9	0.0
モルドヴァ人	5.1	2.8	2.3	0.0
グルジア人	3.9	3.1	0.8	0.0
リトアニア人	1.3	1.1	0.2	0.0
エストニア人	0.6	0.5	0.1	0.0
ラトヴィア人	0.2	0.1	0.1	0.0
その他	426.2	288.3	137.9	1.7
ウズベキスタン（合計）	25,115.8	9,286.9	15,828.9	100.0

（出所）ウズベキスタン共和国国家統計委員会、2002 年 1 月 1 日現在。

ベク人が衝突したフェルガナ事件である。フェルガナ事件は、当時の困難な社会・経済状況を背景に、かつて強制移住させられてきた「よそ者」である（ウズベク人と同じトルコ系ムスリムの）「メスヘティ・トルコ人」が不満のはけ口にされたという構図がある。しかし同時に、このような事件には、ソ連末期から独立直後にかけて民族主義を謳った政治家や運動が増えたことも関係している。彼らの主張の多くは、ロシア語・ロシア文化を中心としがちな共産党やソ連中央政府の政策に対する反発であった。なぜなら、こうした政策はソ連邦を構成した各共和国の主要な民族の言語、価値観、宗教に対する愛着を否定してきたからである。独立後は国家建設の一環としてウズベク・ナショナリズムが国家的に奨励されているものの、（ウズベクおよびその他の民族の）過激なナショナリズムについてはその危険性が認知され、歯止めがかけられている。

宗教の面では、ウズベキスタン人口の九割以上がムスリム（イスラーム教徒）である。しかし、ソ連時代の宗教政策、生活様式や教育の影響で、時にはムスリムであることと矛盾する行動も見られる。例えば、ムスリムでありながら酒を飲み、一日五回の礼拝を行わない人も少なくない。また、ラマダーン（断食月）に断食を守らない人もいる。それでも、イスラーム教の教えを守る人とそうでない人の間に亀裂はなく、お互いに対する批判もない。

つまりウズベキスタンにおいて、宗教に対する姿勢は多くの場合、個々人の選択に任されているのである。

ウズベキスタンの主なＧＤＰは農業によるものであり、これは一九九一年の独立前と変わらない。農業の主要生産物は綿花で、小麦、野菜、果物なども多く栽培されている。ソ連の綿花栽培を支えていたウズベキスタンは、独立後、世界でもっとも多く綿花を栽培する国となった。しかし、ソ連時代から続く過剰な綿花生産には弊害も多い。まず、土地の質の悪化による生産力の低下が見られる。また、綿花栽培は大量の水を必要とするため、中央アジアの主要な河川であるアム川とシル川の水位が大幅に下がってしまった。その結果、アラル海の面積が激減し、深刻な環境問題を引き起こしているのは周知の事実である。

工業面では、ソ連時代から残っている工場（飛行機工場やトラクター工場など）があるが、ソ連邦崩壊に伴って部品調達が難しくなったため、生産は低迷している。その理由はウズベキスタンの企業はソ連時代からロシアや他の共和国の企業とつながりが深く、ウズベキスタンで製品を完成させるにはこれらの国々から多くの部品を輸入する必要があったからである。ただし近年、ウズベキスタンと独立国家共同体（ＣＩＳ）諸国（特にロシア）との関係強化の影響もあり、工業面でも生産を安定させようという動きが見られる。独立後の新

たな産業としては自動車生産が挙げられる。これは、韓国の大宇とウズベキスタン政府との共同出資事業として始まったが、大宇の倒産に伴いウズベキスタン政府が一〇〇％の株を買い取った。その影響で外車にかかる輸入関税が引き上げられたため、現在、ウズベキスタンを走る車のほとんどがウズベキスタン製である（なお、旧ソ連製の車はあまり見かけなくなった）。さらに、幹線道路や建物（住宅やオフィスビル）の建設ラッシュによって、ウズベキスタンの都市部のイメージはソ連時代とは大きく様変わりしている。

Ⅱ　ソビエト政権下でのウズベキスタンの形成

ロシア革命前、現在のウズベキスタンに当たる地域には、オアシス地域を基盤とする三つのウズベク人の政権、ヒヴァ・ハン国、ブハラ・アミール国、コーカンド・ハン国があった。しかし、一八六五～一八八六年に帝政ロシアはコーカンド・ハン国領内に侵攻し、さらにブハラ・アミール国とヒヴァ・ハン国に対しても軍事行動を開始した。その結果、一八六八年にブハラ・アミール国、一八七三年にはヒヴァ・ハン国がロシアの保護国とな

った。そして、コーカンド・ハン国は一八七六年にロシアによって廃止・併合されるに至った。また、一八八五年には、帝政ロシアと英国による協定の結果、パミール地方も帝政ロシアの一部となった。こうして、中央アジア南部の地域はすべて帝政ロシアの支配下に組み込まれるのである。一八六七年、タシケントに置かれたトルキスタン総督府は、一九一七年のロシア革命までこの地域を植民地として支配した。

一九一七年のロシア革命は中央アジア全体に大きな影響を与えた。その影響を受けて、中央アジアにも革命運動が広がった。一九一八年、ソビエト政権はかつての植民地にトルキスタン・ソビエト社会主義自治共和国を樹立した。その後一九二〇年までに、ソビエト政権の影響で旧保護国に代わってヒヴァ（ホラズム）・ソビエト社会主義自治共和国とブハラ・ソビエト社会主義自治共和国が成立した。同時に、ロシア・ソビエト社会主義共和国（以下、ロシア共和国）の一部としてキルギス・ソビエト社会主義自治共和国（後のカザフスタン）も成立した。一九二四～一九二五年の民族・共和国境界画定により、中央アジアの社会主義共和国の名称や構成はさらに変化した。例えば、一九二四年にはウズベク・ソビエト社会主義共和国が誕生し、この共和国は、その領土内にタジク・ソビエト社会主義自治共和国をもっていた。同年末に、トルクメン・ソビエト社会主義共和国も成立した。一

九二五年にはカラカルパク自治州がロシア共和国内に成立し、その後一九三二年にロシア共和国の一部としてソビエト社会主義自治共和国の名を与えられた。そして一九三六年にはウズベク・ソビエト社会主義共和国の一部となった。これに並行して、一九二九年にタジク、カザフ、両自治共和国が、一九三六年にはキルギス自治共和国がそれぞれソ連邦を構成する社会主義共和国という地位を与えられた。

このように、中央アジアにはソ連邦を構成する五つの共和国（ウズベク、トルクメン、タジク、カザフ、キルギス社会主義共和国）ができ、ウズベキスタンもその一つだった。ロシアを除く他の一三の共和国と同じように、ウズベク・ソビエト社会主義共和国の共産党が組織され、閣僚会議や最高会議などが設けられた。党第一書記はソ連共産党書記長によって任命され、ウズベキスタン共産党幹部会がそれを承認した。第一書記はウズベク人で、共和国内である程度の自由を与えられていたが、第一書記以外には、ソ連中央政府から送り込まれた人材が党や閣僚会議のさまざまなポストに就いた。ソ連の共産党と中央政府は、このような人事の仕組みをとおしてウズベキスタンを運営したのである。

Ⅲ　ウズベキスタンにおけるペレストロイカ

ゴルバチョフの登場以前は、共産党の書記長が代わっても一般の人々にそれほど影響はなかった。ウズベキスタンでは綿花事件（注1）があったものの、それに影響を受けたのは主に共産党の指導部や綿花生産にかかわっていた人たちだけで、一般人は無関心のまま各々の生活を送っていた。一九八二年にブレジネフ書記長が亡くなったとき、私は小学生だった。教室に教頭が入ってきて、ブレジネフの死を伝えた。私たちは内心喜んだ。その日の授業が休みになったのだから。

「今日は悲しい日だから、帰り道では遊ばず静かに帰ってね」と言われたが、思わぬ休みを得て、心は弾んでいた。ところが、家に戻った私は確かに悲しむことになった。テレビはどのチャンネルに回しても、ブレジネフの追悼番組を終日放送していたからである。その後、アンドロポフがソ連共産党書記長になるが、彼が亡くなったときも、私はこのような喜びと悲しみを再び経験することになった。

ゴルバチョフの改革が始まると、ペレストロイカ（建て直し）、グラスノスチ（情報公開）、

オブノヴレニエ（新生）が三つのキーワードとなり、テレビやマスコミがその言葉を繰り返し使っていた。ゴルバチョフが当時目指していたのは、政策の決定過程において情報を公開し、政治の透明性を高めることだった。彼の考えでは、それが制度改革につながり、国民の政府に対する信頼回復や国家制度の再生に至るはずだった。しかし、ゴルバチョフ自身も彼の周辺も、その意味を国民がわかるように説明することはできなかった。次第に、国民の多くはこれらの言葉を聞いても反応しなくなり、これらは皮肉な冗談の対象になっていった。ゴルバチョフがPRキャンペーンの一環として国民と会うたびに国民は社会的な問題や具体的な問題を彼にぶつけたが、ゴルバチョフは三つのキーワードを並べて長い説教をするばかりだった。彼自身、何かを変えなければならないと思っていたはずだが、彼の手法、国民への接し方は、やはり党官僚のものであり、人を見下して物事を教えてあげるといったものだった。

注（1）「綿花事件」とは、ラシドフと彼の側近がウズベキスタンで生産された綿花の統計をソ連中央政府に過剰に報告し、実際には提供されていない綿花の代金支払いを請求したうえ騙し取った事件である（一九八三年）。

このような状況を物語る出来事を思い出す。十四歳の頃、私はスポーツジムに通っていて、ある日ロシア人コーチと地下鉄の駅まで一緒に歩いていた。彼とはソ連の政治状況やスポーツについて話をした。私から見ると、当時のソ連はどんどん民主化されていて、かつてないほどの可能性が開かれつつあるように見えた。そこで私はロシア人コーチにそのような考えを述べ、毎日のようにテレビで放送されていたソ連人民代議員大会での議論について意見を求めた。すると彼は意外なことを口にした。

「国民を代表し人民会議場にいるほぼ全員が役立たずだ。あれだけの時間と私たちの税金を使って議論するよりも、彼らが同じ時間とエネルギーで掃除でもすれば、ソ連全体がきれいになって公共の清掃サービスはいらなくなるはずだ。彼らほど頭の悪い人間は少ない。(状況は)絶望的だ!」

彼はそう言い捨て、地下鉄に乗ってしまった。十四歳の私には衝撃的で理解しがたい言葉だった。

しかし、この言葉からは当時のソ連指導部と一般国民との間に生じていたズレを垣間見ることができる。ゴルバチョフ以前の書記長の言葉が特に明快でわかりやすいものだったとは言えないが、少なくとも国の将来に対する彼らのビジョンははっきりしていた。たと

えそれが社会主義的な発展と共産主義の達成というイデオロギー的な内容であっても、その目的ははっきりしていた。それに対し、ゴルバチョフ在任中、彼や他の指導者がソ連という国をどのように改革し、どのような国にしたいのかは国民には理解不可能だった。ゴルバチョフはそれまでのどの書記長よりも多くの時間を国民との対話に使ったが、彼はいつも国民の疑問に答えるというよりもむしろ疑問を増やしていったのである。

一般市民にとって、ペレストロイカ時代の前半は「自由化・民主化」、後半からソ連邦崩壊までの時期は「経済的困難」および「政治的混乱」という言葉で表すことができる。一般市民の間でもっとも多く見られた反応は、ソ連全体の経済状況が悪化していく中、その混乱を利用して私益を確保するか、状況を見守るというものだった。また、この時期、政府や共産党への批判は人々の間で挨拶代わりになっていた。とりわけ批判の対象になったのは、テレビで毎日放送されるソ連人民代議員大会やソ連最高会議に出席した代表たちの議論やケンカだった。その一方、ほとんどの人はまじめに仕事に通い、普段どおりの生活を送っていた。人々は仕事場や学校でソ連全体の状況について話したり、当時の政治にまつわるアネクドート（小話）を交わし合ったりすることで、変わりゆく状況に対応しようとしているように見えた。

結局、ゴルバチョフの長いスピーチを聞く人は減っていき、彼や中央政府、共産党を信じる人も減っていった。このような改革への不信の結果、かつてあったような国家に対する信頼や期待、ソ連国民としてのプライドは失われていった。結果として、それがソ連邦崩壊とウズベキスタンの独立につながった。

以上の過程はウズベキスタン国民の生活のさまざまな側面に少しずつ影響を及ぼし、彼らの自己認識（アイデンティティ）、物事に対する考え方（メンタリティ）、経済力、家庭内関係、信頼、価値観などにも衝撃を与えることとなった。その影響はどのようなものだったのか、人々に何をもたらし、彼らから何を奪ったのか、本書をとおして考えてみたい。